



Welcome to the Faculty of Dentistry

歯学部長 山田好秋

皆さん入学おめでとう。さて、あなた方もこの歯学部ニュースを読む頃には大学生活に少し慣れ、受験勉強をしていた頃から比べて客観的に国立大学や歯学部を取り巻く環境に目を向ける余裕が出てきたのではないかと期待しています。

新聞等で聞き及んでいるかもしれませんが政府の機構改革の一環として独立法人化が来年春に実施の見込みとなってきました。学生諸君にはピンとくる話題ではないかもしれませんが、新潟大学も国立大学の名前は残るものの、従来の国立大学のように全ての費用を国から援助してもらえなくなる組織ではなくなります。国の援助がその大半を占める組織であることには変わりはありませんが、援助を求める以上「義務としての教育・研究成果」を国民に納得してもらえぬ形で示す責任が強化されます。こんな中で、全国の歯科大学・歯学部は一体となって歯学教育の改革を模索しています。

その具体例の一つとして共用試験制度を全国の歯科大学・歯学部が協力して準備しています。従来は厚生労働省が管轄する歯科医師国家試験だけが全国的に実施される試験であり、各歯科大学・歯学部の教育成果を評価する唯一の方法でしたが、昨年より共用試験が試験的に運用され、平成17年度には4年生を対象に正式に実施されます。共用試験はCBT (computer based test) と客観的臨床能力試験 (objective structured clinical examination : 略して OSCE) とで構成されます。前者はコンピュータ化された試験システムで大量にプールされた試験問題からコンピュータが個人個人それぞれに選択して提示し、その結果を集計します。その目的は学生が臨床実習に移行できるだけの知識を持っているか否かを評価することに

あります。後者は主として臨床に必要な技術や態度 (患者さんへの対応法など) を評価する目的で、実際に治療器具を操作する課題や、模擬患者さんを使って学生の対応を評価するものです。各大学の平均点が公表されますから、間接的に各大学の教育評価にもなります。いずれも基本的な知識を問うものであり、決して難しい問題ではありません。日常の予習・復習を怠ることなく普通に学んでいれば80点は十分取れるように準備された試験であることを理解しておいてください。

ここで紹介した改革は決して学生だけを対象としたものではありません。より質の高い学生を卒業させるために教員にも「教育方法を学ぶ機会」いわゆるFD (faculty development) を通して教員の質の向上にも努力しています。学生から見て、改善してほしいことがあれば、どしどし意見を述べてください。教える側には点数を付ける (または単位を認定する) といった優位性が目につき、学生から教員を評価することに抵抗があるかもしれません。しかし、シラバス等に提示された手順でまじめに勉学しても十分な点数が与えられないのであれば、教育を提供する側にも問題があるかもしれません。そんな場合には教育する側を改善しなければなりません。

新潟大学歯学部を全国の歯学部のトップランナーにするためには教員と学生の協力が必要です。いずれ患者さんが卒業大学 (学部・大学院) の評価を歯科医院選択の参考にする時代がやってくるでしょう。歯科医としての成功はすでにあなた方学生の時代に始まっているということを自覚しておいて下さい。



平成15年度 新潟大学歯学部 入学おめでとう

新潟大学歯学部附属病院長 宮崎 秀夫

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。

将来、歯科医学・医療に携わることになるであろう多くの仲間が、今年も全国から新潟の地へ集まってきました。歯学部と附属病院の教育陣もその出身は北海道から沖縄まで広く分布していますので、たとえホームシックに陥ったとしても皆さんの郷里に近い先生がきっと力になってくれるでしょう。それより、もっと視野を広く、歯学部にとらわれない幅広いコミュニティー（人の交流）を築いて下さい。将来に渡って、きっと大きな財産になるでしょう。

さて、附属病院は歯科医療を行う地域基幹病院、研究病院に加え、臨床教育の重要な場となっています。本学歯学部では、入学後直ちに病院実習を行うカリキュラムを全国に先駆けて導入しました。受給側と供給側の両面から歯科医療を体験することによって、歯科医療の現状・問題点を自ら感じつつ、基礎歯学・臨床歯学を学習し始めるにあたって動機付けを行うことを目標としています。医療を実践するには科学的な証拠の裏付けが必要です。いつ、どこで、何を学習するのでしょうか？ 今みている医療行為が正しいとする根拠やメカニズム（機序）は？ クエッションマークがたくさん上がってくると思います。一つひとつリストアップしておく、それらを解決できる講義・実習が楽しみになるでしょう。また、ヒトを診ることはどういうことかを体得し、将来の進路の方向性を考える端緒を掴む機会でもあります。医療人としての基本的な身なり、振る舞いができ

ますか？ 患者さんや医療スタッフとコミュニケーションがとれますか？

歯学部附属病院には口臭、いびき、味覚、ドライマウス、歯周組織再生、歯周病遺伝子診断、金属アレルギー、インプラント、摂食・嘔下リハビリテーション、歯の移植、心身歯科医学、顎堤形成など従来の歯学のイメージから想像もつかないような専門外来が数多くあります。先輩諸氏が営々築き上げてきたものです。皆さんも高度専門医療人を目指し、新しい学問・診療分野を開拓していく夢を持っているかも知れません。しかし、決して一般的な歯科医療（プライマリーケア）の修得は怠らないで下さい。一般医療はできないけれども高度先進医療はできるという人は存在しません。ローマは一日にして成らずです。

最後になりましたが、歯学部附属病院は本年10月より、医学部附属病院と一体となった医歯学総合病院としてリニューアルします。一気に変わることはありませんが、全人的医療を見据え、超高齢社会に対応した医学を取り込んだ歯科医療の展開ができるようになります。皆さんが5、6年次になり、本格的な臨床実習を行う頃にはそれらの全貌がみえているでしょう。社会は絶えず変革していきます。医学もすごいスピードで進化していくでしょう。皆さんはその中に身を置くだけでなく、変革させる一員となるのです。当面はその準備をする期間ですが、時間の有効な使い方、常に前を向き、必要な情報を捉えて逃がさない研ぎ澄まされた感性を養うことを期待いたします。



『食べる』のサポーターへのスタート —歯科技工士学校入学を祝して—

歯学部附属歯科技工士学校長 野田 忠

歯学部駐車場の満開の桜を見ながら入学して、もう夏になりました。歯科技工士という職業がどんなものか、まだよく分からないうちに、講義や実習が進み、それとともに何となくではあるものの、少しずつ歯科技工士になるという自覚が出てきたことと思います。

歯科は、齲蝕や歯周病の予防や治療、義歯などと、一般的には思われていますが、本来は生れてから死ぬまでの口腔の健康維持、簡単に言えば、一生楽しく食べるためのお手伝いがその役目です。もちろん歯科は、食べることだけではなく、話すことなどさまざまなものに関与しますが、やはり『食べる』ことへのサポートが、一番大きな役目であり、期待されているものです。

保険会社の「好きなことは」というアンケート調査で、子どもからお年寄りまで、「食べること」を第1位にあげています。おいしいものを食べるのは、生活の中での喜びの一つで、これは高齢になるほど強くなってきます。一方、高齢になるほど歯や顎が衰えてきますから、『食べる』ことのサポートは、より必要になってきます。

『食べる』のサポートは、歯科医師、歯科技工

士、歯科衛生士がサポーターとなって行われます。サポーターはそれぞれに役割がありますが、お互いに綿密に連携してやってゆかなければなりません。

アルビレックスの試合を見に行ったことがありますか？ ワールドカップをやったビッグスワンで、3万人を超えるサポーターが、アルビレックスの勝利を願って応援します。サポーターは選手と一緒に勝利に向かって進み、選手と一緒に喜びます。

『食べる』のサポーターである我々も、患者さんが美味しく元気に食べられるように、お互いが連携して全力を尽くし、患者さんと一緒に喜びたいものです。2003年4月、皆さんは人々の食べる喜びのためのサポーターとして、スタートをきりました。

歯科技工士学校の2年間、サポーターとしての基礎が積み重ねられ、磨かれて行きます。2年間という短い期間の中で、多くのものを身に着けなければならぬので、かなりの頑張りが必要となりますが、20人の仲間とともに、『食べる』のサポーターとして、大きく育って行ってください。